

牛伏川階段工完成 100 周年記念見学会及びシンポジウム／事例発表会

⑧ とやまの石工の活躍 / “とやま” 川の会 高島一郎 林達夫

1. 牛伏川階段工と富山の石工のかかわり



フランス式階段工

第二節 こぼれ話

越中寮

明治三〇（一八九七）年、わが国に初めて砂防法が公布された。明治一八年、内務省直轄で着工された牛伏川砂防工事はこの砂防法に基づいて、国庫の補助を受けて翌三一年から長野県が引き継いで行われることになった。切石を主体にした工事であるので危険が伴い、地元の素人丈夫の間には怪我人が多く次第に人夫の数が減り、工事に支障を来たすので、明治三五年、飯田又三郎主任にかわって着任した丸山丈之助氏は前任地で知り合った越中の人夫に交渉して五〇人を確保し、事務所の近くに二棟を建て越中寮と名付けた。

従つて、工事の主力は越中人夫で休むことなく行われ、力のある者は石を担ぎ、弱い者は芝を背負うといふように各工事場へ適材適所に配置され、越中人夫に倣つて働いた。越中寮は、現在のいこいの広場の四阿のあたりにあり、人夫の多くは富山県砺波市の農家の出身であったそうである。

「牛伏砂防工事沿革史その四」より



越中寮（明治三十二年撮影）

越中寮跡地_階段工上部のキャンプ場
(2015 年 11 月撮影)

2. 富山の石積技術の流れ

富山の石積技術の流れは、地域により多少異なる場合もあるが、概ね次のように考えられる。

戦国時代

- ・安土城、大阪城、熊本城など城（山城、平城）を造るのに石積みが必要となった。
 - ・越中は外からの支配であり城の築造がなかった。
-
- ・戦国大名がいる所で石積技術が発達
 - ・「穴太石工」の活躍

江戸時代（前期）

- ・信州等からきている庄屋が、石積みや農業等の技術を伝えた。
- ・高岡城石垣、富山城の築造、松川除工事等により石積技術が確立した。

江戸時代（中～後期）

- ・用水や開墾、護岸等の工事で石積技術が発達した。
- ・特に、加工に容易な原石がある川沿いで発達した。
- ・特に洪水が多発し、護岸工事が頻繁に行われ、その都度石積みを行った。
- ・一方で金沢城普請に関わったり、信州へ川除け普請として出稼ぎに行くなど、県外へ技術を持ち出した。

明治・大正時代

- ・常願寺川大改修工事や県営の砂防事業が開始され、大規模な石積み工事が行われた。
- ・砺波出身の石工が牛伏川のフランス式階段工を行う等発注者の技術屋に付いて現場をまわっていた。
- ・一方で笹川の石工等が、県外の河川や国鉄の発電所工事等の請負を行うようになり、これまでの石積技術を活かすと同時に。間知石積等の技術を習得してきた。

昭和時代（前期）

- ・直轄砂防工事が開始され、また度重なる水害による河川工事等の石積を行った。
- ・また県外の砂防工事や災害復旧等の石積工事を行い、全国に渡って活躍した。

昭和時代（中～後期）

- ・コンクリートの普及や河川の野石の減少したことにより、石積工事が減少した。
- ・石仏や墓石等の石造、石垣を行っていた。

現代

- ・金沢城の復元や石造、石垣の仕事を行っている。
- ・海外から、石積み技術の習得にきている。

3. 富山県内の石工職人の流れ

一般的に「石積に用いる石材が豊富な箇所に石工が多くいる」と言われており、富山県内でも、常願寺川、笹川、片貝川、早月川、庄川等の各水系に石工グループがいくつもあった。また、富山県内では、水害がよく発生した箇所にも石工が多くみられた。

小矢部・庄川

- ・江戸時代の初期から当地に住みついた庄屋が、地元に石積や農業技術を伝えた。
- ・砺波、高岡市（中田）に石工職人が多かった。
- ・庄川町の金屋地区は、護岸工事から、墓石、石仏、庭石などの石工職人になった者が多くいた。
- ・庄川の水害に伴い、多くの石積みが災害復旧として行われたことから手際がよく、他県での災害復旧（伊勢湾台風、福井地震など）や梓川の川除けに、富山の石工（砺波の石工集団など）が関わっている。
- ・信州では、越中普請と呼ばれていた。
- ・牛伏川のフランス式階段工等の石積みは、砺波の石工約 50 人が行っている。地元では、その宿場を「越中寮」と呼んでいた。
- ・現在でも庄川特有の大きな石を用いた亀甲積みを行っている石工はみられるが、以前からみるとかなり石工が減少している。

神通川

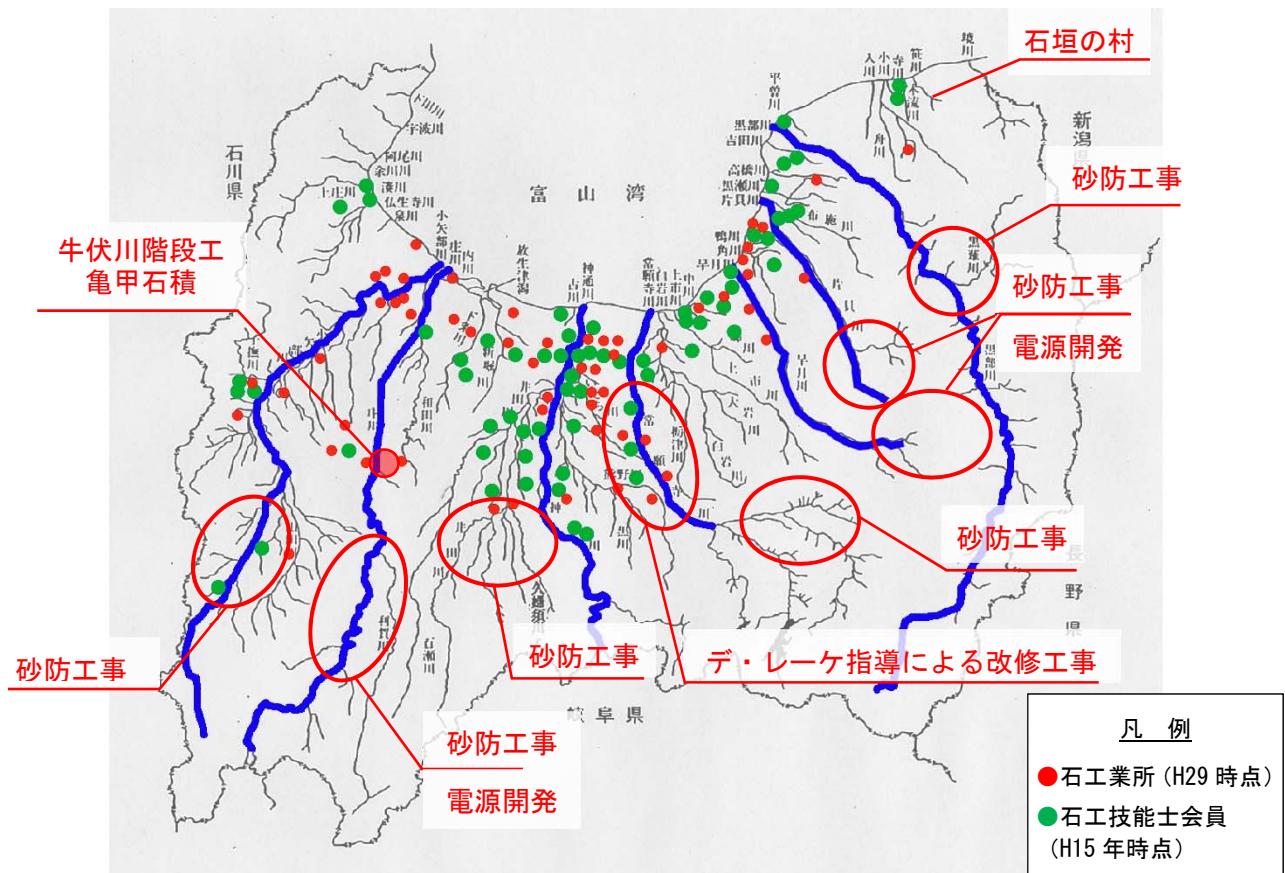
- ・八尾町に、多くの石工がいた。
- ・現在も数人残っている。
- ・神通川の馳越工事は、柳瀬村（砺波市）の職人（現在の佐藤工業）が関わっていた。
- ・中島閘門の曲面護岸などの石積を行った。

常願寺川

- ・江戸時代の初期は、水害箇所の復旧工事にきた石材産地の石工集団の下請けとして地元の石工集団があった。例えば、大山町善名の石工集落である。
- ・富山市（石屋、太田、西ノ番）、千垣、大山町の亀山一族等、石工職人が多かった。
- ・常願寺川の水害に伴い、多くの石積みが災害復旧として行われたことから手際がよく、他県での災害復旧（伊勢湾台風、福井地震など）工事や砂防堰堤の工事に関わっている。
- ・現在の石工は、地元も建設会社に所属している。

黒部川・笹川

- ・朝日町（笹川）、魚津市の浜田一族、滑川の金山一族に石工職人が多かった。
- ・笹川地区（通称「石垣の村」）は、明治の中頃鉄道の土方や姫川などで出稼ぎに行って、四国の職人などから間知石積み等の様々な石積みを学んできた。明治の後半には、姫川や関川の工事を請負うようになった。
- ・現在、笹川にはほとんど石工はいない。
- ・滑川の浜田グループ、金山グループが活躍しており、平成 12 年頃の金沢城の復元や中国での技術指導を行っている。



石工業所・石工技能士会員分布図

4. 庄川の亀甲石積

- 砺波市東般若地区はかつて洪水被害に悩まされた地区の一つで、護岸復旧工事に石積みに関する仕事が多くあり、大勢の石工職人が居住し、特に高池集落には地区内最多の石工職人を数えた。
- 亀甲石積の歴史は案外新しく、明治後半～大正時代に出稼ぎに行った石工職人により伝えられたといわれている。
- 石積技術は、得られる石材により川筋ごとに特徴があり、庄川流域で多く見られる大きな「玉石を用いた亀甲積」は、庄川の特性に応じて現在のスタイルが形成され、それぞれの個人の家の石垣を美的に積み上げて行く景色は砺波ならではの文化であり、全国的に貴重なものである。



民家の石垣にみられる亀甲積み



玉石を用いた亀甲積み